

斯文

第137号

『斯文』第一三七号 目次

〔論文〕	『開元天寶遺事』瑣談—本文をめぐって—	高野田信	(1)
	湯島台と史跡湯島聖堂	宇野求	(18)
	姜琛の顕彰活動—「姜貞毅先生輓章」をめぐって—	大木康	(37)
	『論語』注釈史に見る潜規則の影	関口順	(52)
	—「朋友の饋」章をめぐって—		
〔講演〕	孔子祭講経	川原秀城	(65)
	『大学』格物物格の口訣	村山吉廣	(70)
	先儒祭墓前講話	安藤智重	(78)
	犬塚印南について	小堀鷗一郎	(97)
	先儒祭記念講演	直井文子	(112)
	安積良斎と近代日本の教育	石川忠久	(121)
	湯島聖堂文化講演会	宇野茂彦	(116)
	冠を正して逝った人びと	石川忠久	(121)
〔書評〕	谷口匡 著『西遊詩巻—頼山陽の九州漫遊』	直井文子	(112)
〔追悼文〕	中原さんを偲ぶ	石川忠久	(121)
	聖社詩草	石川忠久	(121)
	令和三年度斯文会活動概況	石川忠久	(121)
	『斯文』公募論文募集要領	石川忠久	(121)

公益財団法人 斯文会

THE "SHIBUN"

斯文

Number 137 Jun 2022

CONTENTS

Comments on the Text of Kaiyuan Tianbao Yishi (開元天寶遺事)	TAKADA Nobutak (1)
Significance of Yushima Seido as a Historic Building from the Topographical Perspective of the Yushimadai	UNO Motomu (18)
Study to Honor Jiang Cai (姜琛): A Study of Jiang Zhenyi Xiansheng Wanzhang (姜貞毅先生輓章)	OKI Yasushi (37)
Presence of the Invisible Rules in the History of Annotating Lunyu (論語): The Chapter of "Pengyou zhi Kui (朋友之饋)" of "Xiangdang (鄉党)"	SEKIGUCHI Jun (52)
Lecture at the Festival of Confucius: Presence of an Early-Modern Korean Neo-Confucian Scholar Yi Hwang's (李滉) Position of Gewu-Wuge (格物物格) in Daxue (大学)	KAWAHARA Hideki (65)
Remarks made in Front of the Graves at the Memorial Festival of the Old Confucian Scholar Inuzuka In'nan (犬塚印南)	MURAYAMA Yoshihiro (70)
Commemorative Lecture at the Memorial Festival of the Old Confucian Scholars: Inuzuka In'nan (安積良斎) and the Modern Education in Japan	ANDO Tomoshige (78)
Yushima Seido Cultural Lecture: The One Passed Away with Maintaining Their Own Dignity	KOBORI Oichiro (97)
Book Review > TANIGUCHI Tadashi (谷口匡), Saiyushikan:RAI Sanyo no Kyushu Manyu (頼山陽の九州漫遊), Kyoto: Hozokan, 2020	NAOI Fumiko (112)
Interview > Interviewee Mr. NAKAHARA Nobuyuki (中原伸之)	UNO Shigehiko (116)
Index Compiled by the Seisha (聖社) >	ISHIKAWA Tadahisa (121)
Activity Report of the Shibunkai (斯文会) in the Fiscal Year of 2021 >	
Guidelines for the Contributions to The Shibun (斯文) >	Editorial Board of The Shibun (138)

Published and Edited

by

the Shibunkai (the Confucian Society of Japan)

at the Yushima Seido (the Mausoleum of Confucius at Yushima)

1-4-25, Yushima, Bunkyo-ku, Tokyo

昭和四十二年六月二十三日第四種
郵便物認可
毎号一回発行

谷口匡 著 『西遊詩卷——頼山陽の九州漫遊』

二〇二〇年十二月十日、株式会社法藏館 刊

直井文字

著者の「まえがき」によれば、本書は「西遊詩卷」を足がかりにして、九州を旅した頃の漢詩人頼山陽を、再度生き生きと蘇らせようと試みるものであるとのこと。その為にまず山陽の生涯のあらましが述べられ、その父・頼春水の生涯にも言及し、その著作の概要が紹介されています。この「西遊詩卷」は、九州旅行の際の山陽の自筆本であり、通行の刊本『山陽詩鈔』に「西遊稿」として収載された完成版ではなく、上梓にあたって推敲する前の初稿です。そこに焦点を当てて詳細な注や考察を加えた本書から、著者の熱い思いが伝わってくるようです。

本書の目次は、次の通りです。

I章 漢詩人頼山陽の九州漫遊

II章 西遊する頼山陽と『杜韓蘇古詩鈔』

III章 「西遊詩卷」と二つの跋文

IV章 「西遊詩卷」訳注

V章 下関と頼山陽

VI章 頼山陽と下関の商人広江殿峰

附録 1 探訪・京都の漢学

2 入谷仙介先生の教え

3 「西遊詩卷」影印

第I章では、まず山陽の代表作である『日本外史』の内容と、その執筆への山陽の姿勢が述べられ、そのことと九州への旅との関連が分析されています。次に西遊中の山陽の詩は後世の評価が高いこと、その特色が述べられ、山陽の九州旅行の成果がまとめられています。

「西遊詩卷」は文政元年（一八一八）九月、行年三十九

歳の山陽が鹿児島にて河内源兵衛に贈与したものであり、五十二首の作品が収められています。その為、それ以後のこの旅行中の作品は入っていません。しかし山陽が鹿児島より後に訪れた耶馬溪と「耶馬溪図巻記」についても、著者は改めて山陽の西遊の成果として挙げています。耶馬溪は頼山陽によって、（大和の）月ヶ瀬は齋藤拙堂によって喧伝され、有名になったと言われています。当地の人びとにとっては見慣れていて珍しくはなかった溪谷が天下の絶景であることを山陽が発見し、そこに「耶馬溪」という名称を付し、山水画を描いて詩も賦しました。そしてその絶句九首の詩の中から著者は、有名な「其の一」ではなく「其の八」を選んで解説しています。その後半の二句で杜甫の詩句を逆手に取った手法の見事さを挙げ、そこから第二章の論稿につながってゆくようです。

第二章では山陽が西遊の間に、いかにして詩の素材、表現法を自己の中に蓄積していったか、ということが解き明かされています。九州への旅の前に山陽は下関に一カ月ほど逗留し、その地で世話になった広江殿峰と別れる際に、近作の絶句十二首を揮毫して広江家に贈りました。その内の「中原一髮青何在、中原一髮青何くにか在る」の句を

含む一首が、蘇軾の「澄邁駅通潮閣 二首」の第二首を踏まえていることは先人が指摘していますが、著者はこれに端を発し、山陽が蘇軾以外に杜甫、韓愈、白居易、黄庭堅、李夢陽らの詩からも、遊歴中の詩の素材を得ていたことを詳述します。そして「古今第一の詩人とする杜甫の詩を理解するために韓愈・蘇軾の詩を読まなければならぬ」という山陽の見識を、「単に詩を読もうとする人の発想ではなく、古典に学んで自身でも詩を作ろうとする人のそれであるといえる」とし、はなはだ優れていると評しています。

山陽は自ら杜甫、韓愈、蘇軾の古詩を編纂した『杜韓蘇古詩鈔』と呼べる選集三巻と、作詩の際に用いる韻ごとに分類した単語帳と言える「詩韻含英」とを携行したことが、刊本『山陽詩鈔』の「西遊稿」自序に記されています。『杜韓蘇古詩鈔』を今は見ることができませんが、著者は、もともとあって山陽の「書後あとがき」が残っており、現存している近体詩が加わっている『韓蘇詩鈔』から、山陽の韓愈詩、蘇軾詩への見解を分析しています。そして山陽が韓詩、蘇詩の有名な作をただ選んで集めたのではなく、それぞれの特色を新たに見出し、その見解のもと

に選集を編んだことを個々の作品で確認しています。更に西遊中の山陽の詩が、杜甫、韓愈、蘇軾それぞれの作品からどのように影響を受けたのかを詳述しています。そこに山陽の苦心と工夫の跡を見出しているところに、著者自身の碎身の努力が垣間見えるでしょう。

山陽の蘇軾詩の長所に対する敬意は、「書後」の中から著者の取り上げる「士大夫の善諱（読書人の巧みな冗談）」という言葉に集約されていると思われます。この言葉から、江戸期に流行した「狂詩」を山陽が、作りかけたことがあっても積極的に作らなかつたことと、関連する矜持が見出されます。

第三章は、著者が本書の底本とした『山陽先生真蹟西遊詩』についての紹介と、それに付された二つの跋文の翻字、訳注などです。底本は「西遊詩卷」の原本が、受贈者河南源兵衛の孫の源吉によって明治十九年（一八八六）に複製され、出版されたものです。その二つの跋文は重野成斎、頼支峰が書いたものですが、これらが「西遊詩卷」の成立や山陽の作詩の姿勢を知る上での貴重な資料であり、「西遊詩卷」の解題としての意味をもつ、と著者は説きます。

ると思われます。

それら七首の各詩題が、この「西遊詩卷」では「武侯」「壯繆」「青蓮」「武忠」「和靖」「文忠」「武穆」であるのに対し、『山陽詩鈔』や『詩集』では「孔明」「関羽」「題李白醉図」「郭子儀」「林逋」「蘇軾」「岳飛」となっていることに山陽の意図も窺え、このように山陽の考えを推察するヒントが、「西遊詩卷」全体に散りばめられていると言えます。

第V章では、山陽が九州旅行の往復に立ち寄り、比較的長く逗留した下関の地への山陽の思いが、その詩句を通して考察されています。山陽にとつて彼の地は、広島に次ぐ第二の故郷とも言うべき、安心できる地であつたことが分かります。そして当時の「赤馬関」が東西交通の要所であり、港町として商業も栄え、詩人を経済的にも支えた、良き後援者の居た地であつたこと、そのことを山陽自身がよく理解して存分に詩に表していたことが詳述されています。

その良き後援者と山陽との関係を詳論しているのが、第VI章です。下関の醤油醸造の「勤勉実直な商人である」とも、画や篆刻を得意とする多才な人物であつた「広江殿

長文の跋文本文を読むと、まことにその通り、「西遊詩卷」が書かれるに至つた経過が綴られ、鹿児島地方の有力者と都会の文人・山陽との知的で粹な関係が、とても良い形で御子孫に引き継がれていったことまでも伝わります。重野成斎の山陽の詩文への深い理解、それをまたよく理解する支峰、そしてそのことが描かれている跋文の重要性を見出した、著者の慧眼に感服します。

第四章は、「西遊詩卷」本文の訳注です。刊本の『山陽詩鈔』、『頼山陽全書』の『詩集』などと字句の異同の確認はもちろんのこと、『頼山陽全書』の『全伝』の記述も精査し、詩作時の状況の解説がなされています。

中でも「題画像七首」については、創作時期の異なる作品を集めて七首にまとめられているため、それらが『詩集』の中でどこにあるかを探するのは大変であつたことでしょう。著者は『詩集』の編年を手掛かりに、それらを探し当てています。特にその内の三首については西遊に先立つ旧作を基にしたものに見えるけれども、韻律の整い方から判断する限り、むしろ「西遊詩卷」が初案で、『山陽詩鈔』や『詩集』に収められた作の方は、それらに手を加えた定稿であると思われる点を精察したことは、著者の卓見であ

峰と、その息子秋水と山陽との交友のさまが、山陽の詩や『全伝』その他の資料により、精密に考証されています。決して豪商が財にまかせてというわけではなく、自分は質素な生活をしながら才能ある人を援助し、良き理解者となつた殿峰の人と為りが克明に描かれています。このような支援を受けた山陽の幸福が、その詩句にあふれ出ています。

詩人としての山陽の実力は、この九州旅行で格段に上達した、詩人としての名も上がった、と言われています。その旅行前半の詩の初稿を詳しく紹介し、刊本に漏れた作品にも光を当てている本書は、山陽研究の上で画期的なものでしょう。巻頭に漫遊の行程図もあり、山陽の足跡をたどるのに便利です。西遊した期間に限らず、山陽の生涯の契機となる時期、それまでの過程、またその後のことまでを丁寧に追つた本書は、江戸後期に自由人として生きることを選び、その生き方を貫いた頼山陽の、素晴らしい評伝になっていると思います。その頃の山陽の姿が、目の前に現れてくるようです。

（東京成徳大学教授）